



ベビーブーマーの生まれた時代からの映画における フランスの高齢者像の変遷

著者	グジョン ジョナタン
雑誌名	コミュニカーレ
号	8
ページ	1-19
発行年	2019-03
権利	同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2019.0000000062

ベビーブーマーの生まれた時代からの映画における フランスの高齢者像の変遷

グジョン・ジョナタン

概要

本論文は、映画を通して見るフランスにおける高齢者像について、その特徴や実体を探るものである。そのため、まずは、映画のワンシーンや予告編を例に、テレビ映画と劇場用映画に登場する高齢俳優や高齢女優の特徴を見る。また、社会学的な研究で出された統計の結果を利用し、その結果と映画に現れる高齢者の特徴とを比較し、映画は実社会を映し出す傾向があるかどうかを明らかにする。そして、映画が描く高齢者の孤立についても分析する。そして最後に、実際の社会において起きているパピーブーマーの現象について触れ、パピーブーマーは映画に影響を与えているかどうかを考察する。以上の事柄を総合的に踏まえた上で、社会的な視点から、フランス映画における高齢者像を浮き彫りにしていくことが、本論文の狙いである。

はじめに

20世紀以降、フランス社会では個人主義の発展に伴い、人間関係が大幅に変化してきた(Weil, 2006: 14-20)。社会の変化を題材とした研究は多数あるが、若年層に焦点を当てた研究が多い(Billé & Martz, 2010: 9)。高齢者を対象とした研究では、経済への影響や医学が論点の中心となっている(Guérin, 2018)。つまり、社会的にどのような目で高齢者が見られているか、フランスの高齢層のイメージはどう変化したのかはこれまで研究対象となつてこなかった。そこで、フランスの研究者 Ariane Beauvillard の研究を中心とした既存の研究結果から、1950年から現在までのフィクション映画を通して、どのように高齢者が描かれてきたかについて考察する。Beauvillard

『コミュニカーレ』8 (2019) 1-19

©2012 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

の研究が虚構の高齢者像にあえて留まったのに対し、本研究では、Beauvillard の虚構の高齢者像は社会的な根拠があるかを検証する。さらには、ポストモダン社会の中で高齢者となるベビーブーマーが高齢者像に与える影響という新たな視点から、映画のワンシーンや予告編を例に、しばしばテレビ映画や劇場用映画に現れる高齢主人公の特徴、社会における高齢者の立場を見ていく。

1. 映画と高齢者

1.1. 高齢者をテーマした映画の増減

ヌーヴェル・ヴァーグと呼ばれる新世代の映画運動が登場した1960年代と、高齢者役を演じることのできる大物俳優を失い、後に続く高齢者役の名優がいなかった1970年代には、高齢者をテーマとした映画は著しく減少した。高齢者をテーマとした映画の66%は1980年以降、70%は1990年代以降に作られている (Beauvillard, 2012)。さらに、映画に登場する高齢の主要登場人物の数は50年間で3倍にも増えている (Messy, 1996)。この増加傾向は、社会の高齢化 (Billé & Martz, 2010; Rochas, 2004) にともなって、ますます強くなっていくこととなる。

1.2. 高齢者像とは

「高齢者」は社会学的な言葉で若年者と比較して用いられる言葉である。何歳からという定義はなく (Caradec, 2003: 54; Mathe, Hebel, Perrot & Robineau, 2012: 10)、相手の目を通して自分が高齢者であることを相対的に認識する。目安としては、国際連合では60歳以上¹、世界保健機関 (WHO) の定義では65歳以上の人間を高齢者とみなしている。定年退職者もしくは老齢年金給付対象年齢以上の人間を指すこともある。国際連合によると、現在、世界の60歳以上の人口は7億人であり、2050年に20億人までのぼると予想されている。像というのは主観・意識から成り立つイメージであり、認識や意識などの作用が向けられるものである。つまり、現実より虚構に基づくものであるといえる。いわば、高齢者像というのは、主観的に作り上げられた高齢者のイメージである。

1.3. テレビ映画対劇場用映画

映画にはテレビ映画と劇場用映画の2つがある。フランスでは、テレビ映画と劇場用映画は、その製作も俳優もはっきりと区別された別物として作られてきた。基本的にテレビ映画の役者が劇場用映画で演じることはない。テレビ放映用に作成された映画と映画館での上映用に作られた劇場用映画とでは、映し出されている高齢者像が異なる。大衆向けのテレビ映画では、高齢の男性主人公は平凡な一般人として描かれる。また、テレビ映画に出演している高齢俳優、及び高齢者役を演じる俳優が有名になる例はほとんどない。逆に劇場用映画では、主人公は大人物として描かれ、高齢になった有名俳優が起用される。映画史上、長らくテレビ映画と劇場用映画は、まったく別の世界として存在し、交わることはなかった。だが、そんな2つの世界も少なからず互いに影響し合うようになった。テレビ映画は劇場用映画で人気のあった役柄を後から庶民的に作り変えて使用し、劇場用映画に出演しなくなった女優を起用した。1990年ごろになると、テレビチャンネルが映画市場に入って映画を作り始め、テレビ映画と劇場用映画、それぞれの映画に映し出される高齢者像が似通ってきた。こうして高齢者像は徐々に画一化されていった。その結果、1990年以降の劇場用映画の男性主人公はテレビ映画の主人公に近づいて庶民的になった (Beauvillard, 2012)。これを顕著に表した例が、2005年制作の『Le promeneur du champs de mars (シャン・デ・マルスの散策者²⁾』である。これは亡くなる9年前、1987年のフランソワ・ミッテラン大統領を描いた映画である。登場する大統領は、手の届かない偉い人としてではなく、平凡な一般人と同じひとりの人間として描かれている。

1.4. 高齢の登場人物の主な特徴

テレビ映画では、高齢男性は平凡で空想好きな人物として描かれる。これは、テレビの視聴者に近い人物像である。高齢の女性登場人物に比べると体は元気だが、ちょっととぼけている (Beauvillard, 2012: 58)。テレビ映画の俳優、ミシェル・シモンはそのような役を長い間演じた。一方、劇場用映画に出てくる高齢者は貫禄のある役で、家族や従業員を支配している権力者である。1958年の映画『Les grandes familles (邦題：大家族)』の中で家父長

的な役を演じるジャン・ギャバンがそのよい例である (Beauvillard, 2012: 45)。ただし上記の通り、1990年代初頭から劇場用映画の主人公は、テレビ映画のそれに近づいた役が増える。男性は権力を失い孤独になる。2012年の映画『大統領の料理人 (原題: Les saveurs du palais)』は、大統領任期中のミッテランを描いたもう一本の映画である。この映画では、権力を持っているはずの大統領が料理人に頼ってしまう。大統領のステータスを問わずミッテランの身分を一般人の身分にまで下げたような印象を与える。では女性についてはどうだろうか。劇場用映画に登場する高齢女性は男性より数が少なく、数の面では、高齢男性より高齢女性の人口が多い現実とは異なる。2008年のフランスの人口ピラミッドを参考にすると、65歳以上の男女の人口を比べると、明らかに女性の数が多いのが見てとれる (Mermet, 2012)。映画に描かれる高齢女性の一番の特徴は孤独である。社会的に孤立した未亡人や独身の役が多く登場する。例えば、1971年の映画『Le chat (猫)』は定年退職したばかりで妻に別れを切り出すジャン・ギャバン演じる夫と、女優シモーヌ・シニョレ演じる妻とのふたり暮らしを描いているが、シモーヌ・シニョレは家から外に出ない。フランス国立統計経済研究所³の統計を基にしたグラフ (図1) を見ても分かるように、女性は男性より平均寿命が長く、過去100年において男性よりも長生きしている。このことが、映画の中の未亡人女性の多さに反映されていると思われる。

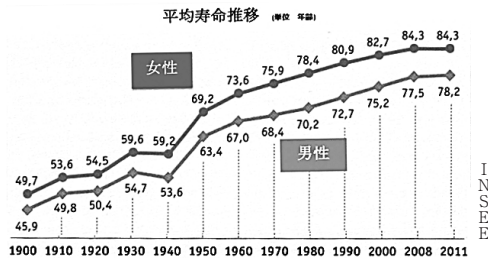


図1 平均寿命推移

(出典) Mermet (2012: 95)

また、高齢女性は、体力の衰えた人物として映し出されることが多い (Beauvillard, 2012: 57)。1990年の『ダニエルばあちゃん (原題: Tatïe

Danielle)』の主人公であるツイラ・シェルトンが、鏡で自分の歳をとった裸の体を観察するシーンがその一例である。1970年代に入ると、そのような高齢女性像に変化が表れる。高齢女性は男性から独立し始める。1980年代後半から映画の中の男性は反動的になるが、それに反して女性は現代的になる。よくテレビ映画で現代的な女性の役を演じる代表的女優がリン・ルノーである。しかも社交的で元気な役が増えている。カトリーヌ・ドヌーヴは2010年の劇場映画『しあわせの雨傘（原題：La potiche）』で、同様に社交的で元気な女性が、社会で活躍する現象を見せてくれた。また、それまで映画では高齢俳優より登場することが少なかった高齢女優が、1980年代前半からは高齢俳優と同じ頻度で登場し始める（Beauvillard, 2012: 69）。

2. 孤立する高齢者

2.1. 様々な場面設定

高齢をテーマとした映画を撮る映画監督の多くは、高齢者の役を近代化の犠牲者として描く。あらゆる場面設定において、孤独感や閉塞感を強調して見せている。

老人ホームは社会からも家族からも離れた場所である。居心地の悪い、一時的な居住地のように映し出されている。まるで、子どもを扱うかのような待遇を受け、高齢者が人間性を失う場所としても描かれることが多い（Beauvillard, 2012: 105）。例えば皆に意地悪をする高齢者を主題とした『ダニエルばあちゃん』では、看護婦は高齢者に対して、子どもに接するような話し方で話をする。テレビを見ることも、楽しむのではなく一人の時間を潰すための暇つぶしとして映し出されている。監督はこのような映し方で孤独感を強調する。外から老人ホームを訪れる人はわずかである。監督が来客を登場させることによって、登場人物間の仲を険悪にさせる。また、2007年の映画『幸せになるための恋のレシピ（原題：Ensemble, c'est tout）』の中には、おばあさんが孫に「もう会いに来ないぞ」と脅されているシーンがある。映画は高齢者の寂しさを強調するために、実社会における老人ホームでの環境や技術の進歩を無視して、古い設備のように見せ掛ける。そして、老人ホームを舞台に高齢者を描くことは、多くの映画監督の慣例になっているといえ

るほどよく使われる場面設定である。

下記の表（表1・2）を参考にすると、実際の比率に比べて、映画の中で老人ホームを舞台に高齢者が描かれるシーンの割合が高く、一部の社会現象を誇張していることが分かる。ステレオタイプを強調している現象の明らかな例である。

表1 1980年～2000年に実際に老人ホームに入っている65歳以上の人口率
(出典) DREES (2011)

歳	65～74	75～79	80～
%	2	4	8

表2 映画の中で老人ホームを舞台に高齢者が描いているシーンの割合
(出典) Beauvillard (2012)

劇場用映画	テレビ映画
40%	25%

老人ホームを舞台としたもの以外では、高齢者を主題としている映画の中では、家に閉じこもる主役を描いた映画が多くある。家は仕切られた舞台である。玄関のドアは、なかなか越えられない壁を表す。夫婦なのに、それぞれが孤独であるといった場面設定が多く見られる。2012年の映画『愛、アムール（原題：Amour）』では、高齢女性と、自宅で彼女を介護する夫の、2人の高齢夫婦の関係についての映画である。光も入ることが出来ない部屋も確認できる。滅多に外に出ない主役が映され、年を取るといのは動かなくなることだというイメージが作られている。2000年の傑作映画『アメリ（原題：Le Fabuleux Destin d'Amélie Poulain）』では、主人公のアメリは家に閉じこもる隣の老人が外に出られるようにビデオを送る。アメリは、隣人がそのビデオを見て自由を感じ、勇気をだして家を出られるように望んでいる。実際、高齢者はあまり家から出ないことが研究結果として出されている。右頁の高齢者の移動頻度を表したグラフ（図2）を見ると、平均として高齢者の移動回数は1日3回以下なので、この点については、映画は高齢者の実際の行動傾向を表していると言える。

さらに、右記の移動手段のグラフ（図3）を見ると、例えば、ほぼ70%

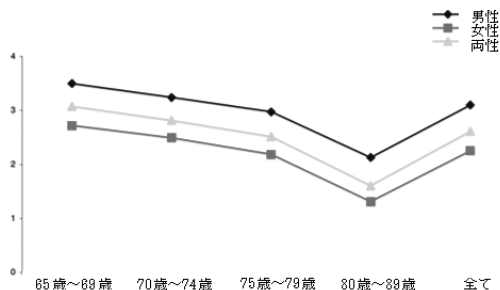


図2 前日の移動 (1人当たり1日の移動回数)
(出典) Dejeammes (2001: 23)

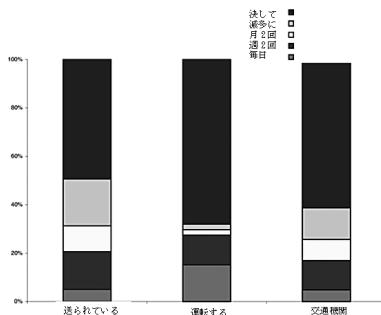


図3 移動手段 (どのような手段で平日に移動するか)
(出典) Dejeammes (2001: 11)

が交通機関や車を利用しないと答えていることから、2000年までの高齢者は、遠出をしない傾向にあることが分かる。

しかし2000年以降、障害者や高齢者等が交通機関を利用できるように、ユニバーサルデザインの設備やサポート等のサービスが大幅に向上した (Aubree & al., 2007)。2010年以降になると、フランスの多くの街 (ブザンソン、アヴィニオン等⁴) には新しい交通手段としてトラムが現れる。よって、今後は交通機関を利用する高齢者の数が増加することが予測される。

だが一方で、街の再開発は高齢者に損害ももたらす。映画の中では、古い建物のとり壊しのために、高齢者が郊外へ追いやられる設定がしばしば見られる。近代的な新しくて冷たい建物のアパートに移住した高齢者は、住みなれた環境や習慣、周囲とのコミュニケーションや長年の人間関係を失う。街

の再開発というのは、高齢者にとって破壊のイメージで描かれることが多い。1975年のドラマ『La vie de Plaisance (パリの孤独)』⁵は、郊外に引っ越した高齢のマルセルと妻が悲しむ話である。引っ越した途端妻が他界し、男やもめになったマルセルは昔住んでいた地区の地下鉄の駅で自殺する。このような映画は、政府が高齢者に敬意を払っていないという非難のメッセージとも受け取れる。建物が崩れる映像は高齢者の社会性が崩れる象徴である。街も非人間的になっていく。『Le chat』からもそのようなメッセージが伝わってくる。映画は高齢者を犠牲者として強調しているが、実際はどうかというと、1960年代から現在も尚、街の再開発によって、貧しい高齢者だけでなく、低所得家庭などあらゆる年齢層の人々が中心街から追い出され高級住宅化する現象が起きていることは事実である (Clerva, 2010)。しかし、映画だけを見ていると街の高齢者が皆追い出されているように見えるが、実際は一部に限られたことであり、多くの街は古いまま残され、高齢者は住み慣れた家に住んでいる (Beauvillard, 2012: 99)。

近代化という点では、田舎も近代化の脅威にさらされている。映画の中では、田舎の高齢者はフランスの伝統を守る地方主義者として登場する。地方の独自性や特徴をうたった台詞が多い (Beauvillard, 2012)。例えば、1981年の映画『La soupe aux choux (キャベツのスープ)』の中で、農家の2人は不動産開発業者に抵抗して畑を売らないように頑張っている。俳優ルイ・ド・フェネスとジャン・カルメが田舎のお爺さんたちのステレオタイプを誇張して演じるコメディ映画の名作である。頑固なお爺さんを演じるピエール・リシャールが上京を断り、自分の村に居残る2018年の『La ch'tite famille (北から来た家族)』や、俳優ジャン・レノが2014年の映画『プロヴァンスの休日 (原題: Avis de mistral)』の中で演じる田舎から離れたことのない高齢者も、地方を保護するイメージを前面に出している。

2.2. 定年前早期退職と定年退職の時期

映画の中では、しばしば定年前早期退職者と定年退職者を高齢者の役柄設定として扱っている。仕事を辞めてのんびりするというのは、疲れやすくて以前のように元気が出せなくなる歳というイメージがある。2010年の映

画『Mammuth (マムート)』ではそのようなイメージを強く感じさせられる。スクリーン上では、退職は当然得るべき休息としてではなく、悪いイメージのもとに描かれることが多くある。定年退職は社会的な活動を終わらせるという意味を持たせて語られる。1970年以前は、映画の登場人物は、高齢でも仕事をしている場合が多く、退職のテーマは映画に多くは登場しなかった。昨今では、退職を機に生活水準を下げ、共同生活・家族・日常生活のリズム・他人とのコミュニケーションを失う人々のシーンが多数ある (Beauvillard, 2012: 90)。退職者として登場するのは、ほとんどの場合、男性である。例えば、『Mammuth』では、主人公のジェラルド・ドパルデューは16歳から定年を迎えるまで精一杯働いたが、過去の幾つかの就業未記録のため、生活がするための年金がほとんど貰えないという事態に直面する。妻と孤独な生活を送り始めた主人公は、年金が完全に貰えるように昔の職場を訪れ、沢山の友人と再会する。『Mammuth』は、あるきっかけで人間関係を再び作る退職者の例外をテーマにしている映画である。また、『Le chat』は退職者のイメージだけでなく、暗い家・街の破壊・孤独な高齢女性・パートナーがいながらも孤独を感じる夫婦、というような高齢者像を強く浮き彫りにした映画である。

実際は、人々は定年退職に対して牧歌的な見方をし、努力した人生のほうびととらえていることが多い (Albérola, Croutte, Hoban & Müller, 2016: 36)。広告や宣伝は自由な高齢者や幸せな高齢者といった肯定的なイメージを伝えている (Dublineau, 2013)。表 (表3) を見ると、フランスでは定年前に早期退職をする人が多いことが分かる。

曲線グラフ (図4) は、年齢層別の雇用率を表している。1975年から2007年にかけて、働いている60歳以上の男女の数は約3分の1に減少している。これには、年金が足りていれば、人々は退職を希望するという現実が表れていると思われる。映画の中では、定年退職者は社会の役に立たないという否定的なイメージと共に表現される。実社会の人々の就業状況や意識が変化してきたにもかかわらず、1970年から2000年まで映画の中の退職に対するイメージは全く変化していない。しかし、フランス人の4分の1が60歳以上になり、60歳以上を対象とした新たな市場が発生した2010年以降

(Mermet, 2012: 152)、退職者は受動的な社会層ではなく能動的な消費者だと見られるようになった。時期を同じくして、映画の中でも、定年退職者は消費者として社会的な役を担うようになる。退職者である主人公が買収した船で友人と旅し、高級食料品を食し、余裕のある生活を見せる2015年の『Entre amis (友達同士)』は現代の高齢者を描いた例の一つである。実社会でも、定年退職者は消費者として社会の役に立つ社会層の一つである。ただし、実社会の高齢者は映画の中のように裕福ではない。2003年から段階的に行われてきた定年退職改革によって、退職後の保障条件が悪くなり、2007年から10年間、60歳以上の労働者が増加している⁶。

表3 定年退職とヨーロッパ

欧州各国における法定年退職の年齢と実際の平均退職年齢(2011年7月1日から)
(出典) Mermet (2012: 155)

	法定年退職の年齢	実際の平均退職年齢
ドイツ	67歳	女性：61.4歳 男性：62.1歳
スペイン	65歳	女性：62.7歳 男性：62.5歳
フランス	60歳 2017年から：62歳	女性：59.1歳 男性：59.4歳
イタリア	女性：60歳 男性：65歳	女性：60.7歳 男性：60.8歳
連合王国	女性：60歳 男性：65歳 2046年から：68歳	女性：62歳 男性：64.1歳
オランダ ポルトガル デンマーク ベルギー	65歳	女性：61.8歳 男性：62.5歳

MISSOC 欧州委員会

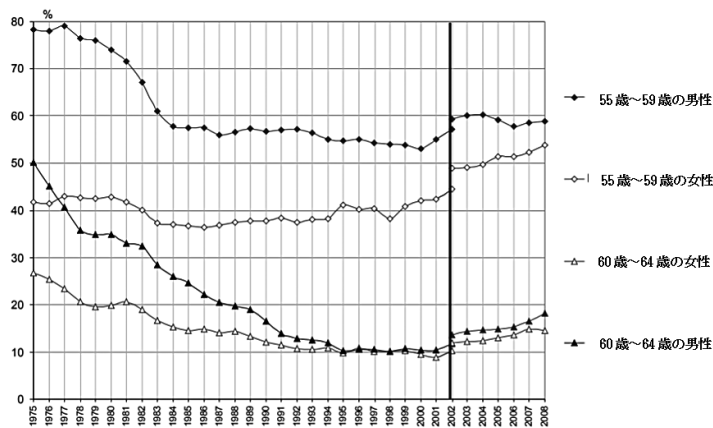


図4 1975年～2008年：年齢層別雇用率

(出典) Thévenot & Minni (2009: 3)

2.3. ポストモダン社会における高齢者像

今我々が生活している社会はポストモダン社会と呼ばれている。ポストモダン社会の特徴は、時間性・主観性等である。

時代とともに、人々の意識が未来から現在へと移動してきた。これまでの若者世代は、未来を夢見て生きていたが、今の若い世代は、明日のことは分からないので、現在を味わうために生きるようになった (Weil, 2006)。一方、映画の中の高齢者は、よく戦争や過去の話をしており、現在を生きる若い世代とは対照的である。昔を懐かしみ、過去に生きている。老年は昔の若さに対比されることで定義される。『Mammuth』では、主人公は古いバイクに乗って過去を探りに行く。

また、時代とともに、主観性が客観性より大事になった。哲学者ルネ・デカルトが、著書『方法序説』のなかで提唱した有名な命題「我思う、ゆえに我あり」は現ポストモダン社会では「我感觉、ゆえに我あり」になった (Weil, 2006)。映画でも人々の主観性に働きかけるようなシーンが多数現れる。映画は観る人の主観性を刺激するために、高齢者の体を描写したり、裸のシーンを撮ったりする。例えば、『Le promeneur du champs de mars』では、裸のミッテラン大統領がお風呂から立ち上がれなくなるシーンが観る人

の気持ちを揺さぶる。また『アメリ』の中の若い主人公は、自分の好きか嫌いかという感覚を紹介することで自分紹介をする。思うことより感じる事が大事であるという風な演出がされている。

3. 集団の中の高齢者

3.1. 家族の中の高齢者

映画の中で、祖母は、喧嘩をしている親子のコミュニケーションを回復させる存在としてよく描かれる。『プロヴァンスの休日』に出演するアンナ・ガリエナも孫と娘と夫の仲直りのために尽力する。また、自分の生き方や考え方、すなわち自分の文化を孫に伝える。『ラ・ブーム (原題: La Boum)』という1981年の映画では、曾祖母は13歳の曾孫に助言を与えたり、昔の話聞かせる (Beauvillard, 2012: 114)。『ダニエルばあちゃん』に登場する意地悪な祖母の行動は、家族の愛情を断る場面設定でブラックユーモアとして受けとめられている。

映画の中で描かれる祖父の役は教育家である。孫にとって人生の教師の役割を果たす (Beauvillard, 2012)。2003年制作の映画『イブラヒムおじさんとコーランの花たち (原題: Ibrahim et les fleurs du Coran)』は、落ち着いた老人オマル・シャリーフが、世代や宗教を超えて、少年に人生を味わう方法を教えていく映画である。このような、人生指導する老人を描くフランス映画が少なくない。しかし、指導する祖母を主題とする映画もある。2010年の『La tête en friche (眠っていた才能)』では、95歳の主演を演じるジゼル・カサドシュは60歳ジェラルール・ドバルデューに文学を紹介し、一般知識を与える。

3.2. 団体の中の高齢者、あるいはパピーブーマー

パピーブーマー (*papy-boomeur*) は現代語として、2012年からフランス語辞書にも掲載されている (Le petit Larousse, 2012)。パピーブーマーというのは、世界大戦終了後、出生率が急上昇し、ベビーブームと呼ばれた時期に生まれたパピーブーマーが、高齢者となった人たちを指す言葉である。映画の中のパピーブーマー像を理解するには、この世代について、もう少し

知る必要がある。

第二次大戦終結後のベビーブームは世界的現象である。1940年代後半から1960年代まで長く続いたフランスのベビーブーマーは家父長的な教育を受けた。親からの支配を強く感じ、社会からも支配されていると強く感じて育った。男女共学が少ない・性教育がない、女性はズボン履いてはいけない、男性は男性で女性は女性という教育を与えられた世代である (Hamon & Rotman, 1987)。ベビーブーマーは成長するにつれて、その圧倒的数から、ひとつの社会層、文化・政治集団として存在感を持ち始めた。ベビーブーマー世代をターゲットとした雑誌やラジオ番組が誕生する。こうしてベビーブーマーの特殊な文化が生まれる (Hamon & Rotman, 1987)。ベビーブーマーは理想的な社会を求めた世代である。近代社会の資本主義に反感をもっている。戦後の急激に変化しつつあった社会の中で支配層である親世代は子どもの理想を理解しない。様々な原因から、ベビーブーマーは伝統的社会に反発し、デモから反乱まで起こす。1963年からの学生運動は、色々な国で起こったが、フランスで1968年に起こった5月革命は、政府の危機をもたらすほど深刻なものだった (Hamon & Rotman, 1987)。学生運動は労働者も巻き込んだフランス全土のストライキに発展し、その結果、労働権の獲得、教育の民主化、自由恋愛など制度・モラルの両面でフランスの社会が大きく変わる事となった。戦後のベビーブーマーは、その後も常に社会の中心にいて政治、経済、文化、メディアの領域で価値観を構築してきた。この世代は人数が多く経済力もあるので社会への影響力は極めて大きいのである。映画への影響も少なくない。異議申し立てをする学生は労働界と繋がった。労働環境待遇を改善する事になった。社会的には、デモという手段によって誰でも意見を伝えられるようになった。国民の誰でも文句や不満があれば、抗議運動という手段で表現できる。親の威厳がなくなり、規律がゆるくなった。学校で勉強している子供は、教師の弟子ではなく学生と見られるようになった。風俗の大変革が起こった。例えば、結婚せずに同居することも可能になった (Hamon & Rotman, 1987)。

社会に強い影響力を持つベビーブーマーが、高齢期を迎えてバピーブーマーとなった今、「Pouvoir Gris (老人パワー)」と呼ばれる力を持って、政治・

社会に影響を与えている⁷。映画でも、パピーブーマー世代の連帯をテーマとした映画が登場する。2011年に監督ロベール・ゲディギャンが制作した映画『キリマンジャロの雪（原題：Les neiges du Kilimandjaro）』で、定年前早期退職者であるジャン＝ピエール・ダルッサンと親友は、労働組合で懸命に奮闘するも、リストラの方法を若者に相談せずに決定してしまったがために悲劇を招く物語である。パピーブーマーは、これまでの高齢者のように、ひとりで孤立するのではなく、仲間と一緒に集団で孤立する傾向がある。2012年の映画『みんなで一緒に暮らしたら（原題：Et si on vivait tous ensemble ?）』はその典型的な例である。しかし、ポストモダン時代に高齢者となったパピーブーマーは、時代の影響を受け、政治力より経済力を重視するようになった。社会全体も消費社会になる。寿命の延びた元気なパピーブーマーは、現在をたのしむ。娯楽は消費社会の基礎である。現在、その事例をスクリーンに映す流行がある。例えば、映画『Entre amis』では定年前早期退職者の友人たちが一緒に夏休みを過ごす話である。義務を軽視し、消費者としての権利、楽しむ権利等を主張する世代が描かれている（Weil, 2006; Le Ru, 2008）。

おわりに

以上、フランス映画における高齢者像を多様な角度から探ってきた。テレビ映画に登場する高齢者は、視聴者の人気を得るために視聴者に身近な平凡な一般人という設定をされるのが特徴だが、1990年以降は、同じ傾向が劇場用映画にもあったことが分かった。映画を通してみることで、高齢者の一番強いイメージは社会から孤立した存在というイメージであること、集団の中では文化の伝承者や人生の師として描かれることが分かった。

一方では、実社会と映画に映し出される高齢者像は頻繁に異なり、映画は創り出された世界であるため、社会をそのまま描写したものではないと言われる（Beauvillard, 2012）。他方では、映画は、評判を得るために、見る人の不安・幻想・ステレオタイプを誇張する傾向があること、大物俳優が演じる映画の人気によって、さらに社会的なステレオタイプが芸術的な文脈から生まれていくといった理由から、実社会を映すものであるとも言われる

(Michaud, 1961: 8)。視聴者は社会的な根拠のある映画から影響を受けるので、映画に現れる高齢者像は、幻想にせよ、実社会の高齢者の反映にせよ、現実の一つであるのだ。

また、テレビ映画でも劇場用映画でも、高齢者を主人公にする映画は全体からするとまだまだ少数だが、実社会の中で人口の大きな割合を占めるベビーブーマーが高齢化している現状の影響を受けている監督や俳優 (Esquenazi, 2000: 42)、すなわちベビーブーマー世代の監督や俳優によって、これからさらに多様な高齢者像が描かれ、高齢者をテーマとした映画のジャンルが増えていくことが予想される。高齢化がますます進む今、フランス社会において、老年期は主要な関心事となっていると言えるだろう。

注

- 1 国際連合 <http://www.un.org/fr/events/olderpersonsday/index.shtml>, 2018年9月8日閲覧。
- 2 Unifrance 参照。 <https://japan.unifrance.org>, 2018年9月4日閲覧。
- 3 L'Institut National de la Statistique et des Études Économiques. <https://www.insee.fr/fr/accueil>, 2018年9月8日閲覧。
- 4 https://www.lexpress.fr/region/besancon-le-tram-de-tous-les-records_1571741.html, 2018年9月16日閲覧。
<https://france3-regions.francetvinfo.fr/provence-alpes-cote-d-azur/vaucluse/avignon/le-grand-avignon-aura-son-tramway-decouvrez-son-trace-632322.html>, 2018年9月16日閲覧。
- 5 <http://www.ina.fr>, 2018年9月18日閲覧。
- 6 <http://www.lefigaro.fr/conjoncture/2018/07/12/20002-20180712ARTFIG00168-le-taux-d-emploi-des-seniors-ne-connaît-pas-la-crise.php>, 2018年10月2日閲覧。
- 7 https://www.lesechos.fr/23/10/1998/LesEchos/17759-012-ECH_1-emergence-d-un--pouvoir-gris-.htm, 2018年9月29日閲覧。

参考文献

Albérola E., Croutte P., Hoban S. & Müller J. (2016). *Bien vieillir, retraite, dépendance, fragilité des seniors. Représentations, réalités et attentes de la*

- population française vis-à-vis des institutions*. Collection des rapports n334. CREDOC: Paris.
- Aubree L. & al. (2007). *Les personnes âgées et la ville. Rapport final 2007*, Observatoire Régional de l'Habitat et de l'Aménagement: Tournai.
- Beauvillard A. (2012). *Les croulants se portent bien ? Les représentations fictionnelles de la vieillesse au grand et petit écran de 1949 à nos jours*, Editionsbdl: Lormont.
- Billé M. & Martz D. (2010). *La tyrannie du "bien vieillir"*, Editionsbdl: Lormont.
- Caradec V. (2003). « Comportements culturels de la population âgée », in *Empan*, n52, Erès: Toulouse, 54–61.
- Clerval A. (2010). « Les dynamiques spatiales de la gentrification à Paris », in *Cybergeo: European Journal of Geography*, document 505. <http://journals.openedition.org/cybergeo/23231> ; DOI: 10.4000/cybergeo.23231, 2018年9月18日閲覧.
- Dejeammes M. (2001). *La mobilité des personnes âgées. Analyse des enquêtes ménages déplacements*, Certu: Paris.
- Direction de la recherche, des études, de l'évaluation et des statistiques (DREES) (2011). <http://www.data.drees.sante.gouv.fr/ReportFolders/reportFolders.aspx>, 2018年9月7日閲覧.
- Dublineau A. (2013). « La représentation sociale du vieillissement dans les médias », in *Avancer en âge: articulations des interventions de promotion de la santé en lien avec les territoires*, Journées de la prévention 大会. 2013年6月5日発表.
- Esquenazi J.-P. (2000). « Le film, un fait social », in *Réseaux*, vol18, n99, CNET/Hermès Science Publications: Paris, 13–47.
- Guérin O. (2018). *ECNI 2018 : « Le choix de la spécialité « gériatrie » est un choix d'avenir »*. <https://sfgg.org/actualites/choisir-la-geriatrie/>, 2018年9月10日閲覧。
- Hamon H. & Rotman P. (1987). *Génération, t. I*, Fayard: Paris.
- Le Ru V. (2008). *La vieillesse. De quoi avons-nous peur?*, Philosopher Larousse: Paris.
- Mathe T., Hebel P., Perrot M. & Robineau D. (2012). « Comment consomment les séniors ? », in *Cahier de recherche*, n296, CREDOC: Paris.
- Mermet G. (2012). *Franco-scopie 2013*, Larousse: Paris.
- Messy J. (1996). « Images de ma vieillesse dans le cinéma », 7^e Art et 3^e Age 大

会報告, Dossier CLEIRPPA, n236.

Michaud R. (1961). « Cinéma, reflet de la société », in *Séquences*, n26, La revue Séquences: Montréal, 8-9.

Papy-boomeur. (2012). In *Le petit Larousse*, Larousse: Paris.

Rochas J-E. (2004). « La vague montante des personnes âgées », in *Population & Avenir*, n668, Population-démographie: Paris, 16-17.

Thévenot C. & Minni C. (2009). *Objet: Evolution du taux d'emploi des seniors (55-64 ans) entre 2000 et 2008*. Direction de l'animation de la recherche, des études et des statistiques. Ministère de l'Economie, de l'industrie et de l'Emploi Ministère du Travail, des Relations sociales, de la famille et de la Solidarité. https://travail-emploi.gouv.fr/IMG/pdf/208-09CTCM_evolution_et_mesure_taux_emploi_seniors_VERSION_INTERNET.pdf, 2018年9月7日閲覧.

Weil P. (2006). *Tels pères...quels fils?*, Eyrolles: Paris.

参考映画

Baroux O. (2015). 『Entre amis (友達同士)』

Becker J. (2010). 『La tête en friche (眠っていた才能)』

Berri C. (2007). 『幸せになるための恋のレシピ (原題: Ensemble, c'est tout)』

Bosch R. (2014). 『プロヴァンスの休日 (原題: Avis de mistral)』

Chatiliez D. (1990). 『ダニエルばあちゃん (原題: Tatïe Danielle)』

Dany Boon. (2018). 『La ch'tite famille (北から来た家族)』

De La Patellière D. (1958). 『Les grandes familles (邦題: 大家族)』

Dupeyron F. (2003). 『イブラヒムおじさんとコーランの花たち (原題: Ibrahim et les fleurs du Coran)』

Gautherin P. (1975). 『La vie de Plaisance (バリの孤独)』

Girault J. (1981). 『La soupe aux choux (キャベツのスープ)』

Granier-Deferre P. (1971). 『Le chat (猫)』

Guédiguian R. (2004). 『Le promeneur du champs de mars (シャン・デ・マルスの散策者)』

Guédiguian R. (2011). 『キリマンジャロの雪(原題: Les neiges du Kilimandjaro)』

Haneke M. (2012). 『愛、アムール (原題: Amour)』

Jeunet J.-P. (2001). 『アメリ (原題: Le Fabuleux Destin d'Amélie Poulain)』

Kervern G. (2010). 『Mammuth (mamート)』

Ozon F. (2010). 『しあわせの雨傘 (原題 : La potiche)』

Pinoteau C. (1980). 『ラ・ブーム (原題 : La Boum)』

Robelin S. (2012). 『みんなで一緒に暮らしたら (原題 : Et si on vivait tous ensemble ?)』

Vincent C. (2012). 『大統領の料理人 (原題 : Les saveurs du palais)』

Post-war representations of the elderly in French cinema

Jonathan GOUJON

Keywords: French cinema, representations of the elderly, representations of the aging baby boomer

ABSTRACT

The goal of this research is to gain a better understanding of the representation of the elderly in French society as depicted in French cinema. Examples taken from filmed scenes or trailers are used to explain the characteristics of aged characters typically seen in films and television. Furthermore, the accuracy of these fictional depictions is analyzed through comparisons to quantitative results from sociological research into the elderly. After an examination of how the phenomenon of social isolation among the elderly is portrayed in French cinema, the impact of the aging of the *baby boomer* generation is discussed in order to consider the place of the elderly in film.

